

パンデミックでもマスクを着けない理由がある。

ーコロナ禍におけるマスク拒否傾向の日米差とその原因ー

氏名 福原明日香

指導教員 結城雅樹

2020年は新型コロナウイルス、COVID-19による世界的なパンデミックが起こった。このウイルスの拡散を防止する効果があるとして、マスクの着用が注目されている。しかし、欧米など一部の国の人々は、マスクの着用に強い拒否感を示し、反マスク派によるデモ活動も起こっている。感染症対策としての、アルコール消毒やソーシャルディスタンスは受け入れられているにもかかわらず、なぜマスクにだけこのような強い拒否反応が見られるのか。そして、マスクに反対する人々は欧米に多く、東アジアには少ないことが知られているが、この文化差が生まれるのはなぜなのか。本研究では、マスクの着用を嫌がる心理の背景は、波及効果の認識と表情認知の方法の文化差が影響していると考え、これを検討した。

本研究では、日本人とアメリカ人を対象として質問紙調査を行い、仮説を検証した。その結果、屋外にいる時と、友人や家族と話している場面で、日本人の方がアメリカ人よりもマスクの着用頻度が高いことがわかった。もしコロナウイルスに感染した場合周囲の人にどれくらい影響を与えるかという波及効果の認識では、ほとんどの対象で日本人の方がアメリカ人より影響を大きく認識していることが明らかになった。また、関係流動性が高いほど、影響力を小さく認識しており、その結果マスクの着用頻度が下がるというモデルが支持される結果となった。表情認知については、マスクをしているときアメリカ人の方が日本人よりも表情が読み取りづらいつ感じていることがわかった。また関係流動性が高いと、マスクをしているとき相手の表情が読み取り辛く、マスクの着用頻度が低くなるというモデルが支持される結果となった。以上のことから、アメリカ人がマスクをしないのは、もし自分がコロナに感染してしまった場合周囲に与える影響を小さく見積もっていることと、口元を見て表情を認知しているので口元が隠れるマスクの使用を避けることの2つの要因が関連していると考えられる。